

二 小单元「日本の文化を考える」

- (一) 対象
高校二年生

(二) ねらい

第一のねらいは、説明的文章の的確な読みを通して自分の考えを形作らせる、ということである。はじめにでも述べたとおり、学習者はとかく書いてあることをすべて鵜呑みにする傾向がある。特に根拠が明確に示された説明的文章においてはその傾向は顕著である。内容に対して是とするならば是で問題はないのだが、自ら考えた上での是であつてほしいと考えた。そこで、共通するテーマに関するいくつかの文章を読んだ上で、その内容をふまえて比較対照しながらその問題について自分なりの考えをまとめてみるというやり方をとることにした。テーマとしては「日本文化」に関するものとした。昨今の国際化の中で、特に日本の若者は自国の文化に関する意識が乏しいといわれる。また、文化の上で日本は後進国で、欧米に対する劣等感を持っているかのような認識も伺われる。文化に優劣があるというわけではないが、日本には誇るべき文化があり、決して卑屈になる必要はないということ、また、自国のあり方について考える機会を持たせたいということ念頭に置いた上でこのテーマを設定した。これが第二のねらいである。また、第三のねらいとして、要約の作業、自分の考えを表現する作業を取り入れることによって小論文に対する意識づくりをする、ということも考えた。

(三) 小单元の構成および指導計画

第一次 導入(一時間)

日本文化についていくつかの文章を読み、最終的にはそれらを題材にして自分なりの日本文化観を形成することを提示する。

第二次 『四畳半の発見』(三時間)

教材観

本教材は西洋近代哲学研究および日本文化論などに関する著作で知られる大橋良介の『日本的なもの、ヨーロッパ的なもの』の一部である。

芭蕉の句をきっかけに四畳半という空間の特殊性を、比較対照により明らかにしている。それを通して偶数的なものよりも奇数的なものを好むという日本文化の特殊性に関する筆者の考えを読みとることができる。それに加えて、海外からの文化の受容における単なるコピーを超えた日本人の姿勢を読みとることができる。

学習者にとってはごく身近にあるものに関する新鮮な考え方であり、新たな発見を経験することができる。また、異文化受容ということに関しても自分の身の回りをとらえ直す機会になると思われる。

指導目標

一、四畳半という空間の特徴を整数の畳数の場合と対比的にとらえさせ、芭蕉の世界と四畳半の空間構造の関係を認識させる。

二、日本文化の特殊性および日本人の異文化受容の姿勢に関する筆者の考えをまとめさせる。

第三次 『日本文化の雑種性』(六時間)

教材観

本教材は評論家加藤周一が昭和三十年に雑誌「思想」に発表したものである。戦後とかく否定される傾向にあった日本文化の独自性に言及した、新しい日本文化論としての評価の高い文章である。教科書にも多く採択されており、定番ともいえる教材である。

日本の文化は根本において雑種であるとし、その雑種性にこそ独自性があり、積極的に意味を見つけないよとする筆者の考えが対比を用いながらあらゆる角度から述べられている。

「雑種」という一見悪印象を与える言葉が実は意味を持っているという意外性に目を見開かされるところがあるだろう。また、筆者の論の組み立て方に触れることは、自分で文章を書く際の糧ともなるのではなからうか。

指導目標

一、筆者のいう「雑種性」の内容を西洋文化との比較でとらえさせる。

二、純粋化は不可能であり、雑種性に意味を見いだすという筆者の考え方をとらえさせる。

三、筆者の論理の展開の仕方を意識させ、自らの表現の参考にさせる。

第四次 まとめ(二時間)

てびきを用いて読んだ文章、それに加えて一年次に学習済の『水の東西』(山崎正和)を要約、各自学んだこと、批判すべき点を取り出させる。さらに自分なりの日本文化観をまとめさせる。

(四)

指導の実際

【第一時】導入

指導目標

・ 発問を中心 to 今後の学習内容について理解させる。

展開 (主な発問および解答)

T 「文化といえばどんなものか。」

S 「古くからあるもの」「伝統的なもの」

- T 「辞書的にいうと『共通の価値観を反映した物心両面にわたる活動の様式』とある。具体的にはどんなものを思い浮かべるか。」
- S 「着物」「お茶」「寺」……
- T 「日本独特のものという感じであがっているようだ、例えば寺に代表される建築、着物に代表される風俗などは文化の代表的なものだろう。あげればきりがなが、浮世絵に代表される絵画などもそうだろう。」
- 「それらに対して、日常どのように接しているか。例えば、お茶とかお花とか、そういうものに対してどう思うか。」
- S 「あまり接することはない」「自分には関係のないもの」「縁の薄いもの」
- T 「あまり堅く考えずに、自分の身近に、これこそ日本独特のもの、外国とは違う日本のものというようになものはないか。」
- S 「学校」「部活」「食べ物」……
- T 「それらには、どんな特徴があるのか説明してみよう。例えば外国の人にどういう風に説明するか。」
- T 「案外自分たちのことはわからない、説明できないものだ。日本人の若者は自国のことを知らないとよく言われる。日本のこと、日本の文化のことを発見してみよう。」
- T ・教材提示(プリント配布)
- T 「この二つの文章を読み、筆者の考えをとらえていこう。この二人の筆者の『日本文化とはこんなものだ』という考えをまず読みとり、それに対してどう考えるか、また、それをネタにして自分なりに『日本の文化とはこんなものだ』ということを考えてみよう。」

【第二時】『四畳半の発見』

指導目標

- ・ 提起された問題の内容を読みとらせる。
- ・ 畳の広さの由来、畳と人との関係をとらえさせる。

展開

- 一 目標提示
- 二 全文通読
 - 指名読みさせる(四名)。漢字・語句に注意させるほか、段落分けを意識することを指示する。
- 三 段落分け
 - 近くの者と適宜話し合わせ、根拠を添えて発表させる。
- 四 第一段の読み
 - ・ 芭蕉の句の内容を押さえる。
 - 筆者のこの句の読みのポイント(四畳半の果たす役割の大きさ)をおさえさせる。
 - ・ 問題提起を読みとる。
 - 四畳半の空間構造に関する考察を進めていくことをとらえさせる。
 - 五 第二段前半の読み
 - ・ 畳の広さの由来を読みとる。
 - フリート法やメートル法で測られる広さとの対比に注目させる。
 - ・ 畳と人の関係を押さえる。
 - 「儂林」の内容をふまえ、間に触れることによって次時へのつなぎとする。
 - 六 本時のまとめ・次時の予告

【第三時】『四畳半の発見』

指導目標

- ・ 四畳半の特徴を整数の畳数の場合と対比させ、面積および構図の上からおさえさせる。
- ・ 芭蕉の句と四畳半の構造の関係をとらえさせる。

展開

- 一 目標提示
- 二 第二段後半の読み
 - ・ 指名読み(一名)
 - 問とはどういうものかに注目することを指示する。
 - ・ 問の持つ意味について振り返る。
 - 前時の「儂林」の内容を振り返り、間について確認する。
 - ・ 整数の畳数の場合と四畳半の違いをおさえる。
 - 的という言葉すべて抜き出させ、意味的に二種類に分類させる。
 - ・ 整数の畳数の場合と四畳半の場合に置き換え、面積・構図の上から対比的に四畳半の性質を明らかにする。
 - ・ 芭蕉の句と四畳半の関係をとらえる。
 - 芭蕉の句が四畳半だからこそ成立する人間関係に支えられていることをとらえさせる。
- 三 本時のまとめ・次時の予告

【第四時】『四畳半の発見』

指導目標

- ・ 筆者の考える日本文化の特徴および異文化受容のあり方を読みとらせる。
- ・ 全体の内容について振り返り、まとめさせる。

展開

- 一 目標提示
- 二 第三段の読み
 - ・ 指名読み(一名)
 - これまでの内容との関連を考えながら読むことを指示する。
 - ・ 筆者の考える日本文化の特徴をとらえる。
 - 半端な部分による構造の変化という特徴が日本文化全体に一般化されていることをとらえさせる。
 - ・ 発展としての位置づけをとらえさせる。
 - ・ 全体のまとめをする。
 - 次の二点について、各自ノートにまとめさせる(それぞれ百字程度で)。
 - 1 この文章で筆者のいう日本文化の特徴をまとめてみよう。
 - 2 この文章にある日本文化と外国文化の関係をまとめてみよう。
- 三 本時のまとめ・次時の予告

【第五時】『日本文化の雑種性』

指導目標

- ・ 全文を通読させ、大意を把握させる。

展開

一 導入

- ・ 目標を知る。

—— この文章も自分で日本文化を考えていくにあたっての題材にすることを再確認する。

- ・ 題名読み

—— 「雑種」の言葉のイメージを「純粋」との比較においてとらえさせる。

二 全文通読

- ・ 指名読み(十名)

—— 語句および漢字に注意させるほか、段落の意識すること、「雑種性」の内容に注目することを指示する。

三 大意把握

- ・ 二百字程度で要約する。

—— 題名を意識しながら各自のノートに要約させる。
時間終了後、提出させる。

四 次時の予告

【第六時】『日本文化の雑種性』

指導目標

- ・ 前時の内容をふまえて段落について考えさせる。
- ・ 問題提起の内容についておさえさせる。

展開

一 目標提示

- 二 大意把握・段落分け

- ・ 要約のポイントについて考える。

—— 題名からの読みを重視することを指摘する。

日本文化の雑種と西洋文化の純粋の対象、そこにある意味など、ある程度の予測は可能であることに触れる。

- ・ 段落分けをする。

—— 次の三つの観点をあげ、近くの者と話をさせながら考えさせる。

(観点)

- 1 雑種とはどういうことか
- 2 とらえ方の歴史
- 3 雑種性の意味

三 第一段第一節の読み

- ・ 指名読み(一名)

—— 筆者が問題にしていることがどんなことであるのかということに着目させる。

- ・ 問題提起を読みとる。

—— 日本人の立場で日本文化の問題について考えるべきだという主張に続いて、日本人の立場が

問題とされていることをおさえさせる。

- ・ 国民主義的立場についてとらえる。

—— 西洋見物の途中に考えた日本人の立場について、その内容をとらえさせる。

四 本時のまとめ・次時の予告

—— 第一節末の「間違っている」に着目させ、違う立場(日本に帰ってきてから考えた日本人の立場)について考えることを予告する。

【第七時】『日本文化の雑種性』

指導目標

- ・ 筆者が日本に帰ってきてから考えた日本文化を考える際の日本人の立場を読みとらせる。
- ・ 雑種性の内容についておさえさせる。

展開

一 目標提示

二 第一段第二節の読み
指名読み（一名）

——「国民主義」が間違っていると考えるときつかけとなったものは何かということについて考えることを指示する。

- ・ ヨーロッパと日本の違いおよびマレーと日本の違いについておさえる。

——ヨーロッパとの違い、マレーとの違いはそれぞれ日本のどういう側面について述べたものであるのかをとらえさせるとともに、結局は何の違いであるのかを対比的に読みとらせる。

・ 雑種性とはどういうことなのかを読みとる。

——マレーと日本の違いをふまえ、純粋種と対照させながら、日本文化の雑種性ということの内容に触れさせる。

- 三 本時のまとめ・次時の予告

——日本文化を考える際の日本人の二つの立場について振り返り、雑種性に立脚すべきとの筆者の考えについて触れさせる。

雑種性の具体例について触れることを予告する。

【第八時】『日本文化の雑種性』

指導目標

- ・ 筆者のいう雑種性の具体例をとらえさせ、その根の深さに気づかせる。
- ・ 純粋化は不可能であるとの筆者の主張を読みとらせる。

展開

- 一 目標提示

- 二 第一段第三節の読み

- ・ 指名読み（一名）

——具体的にどんどこに雑種性といえる事例があるかに注目させる。

- ・ 雑種性の根の深さについて読みとる。

——雑種性の発現といえる事例を文中からあげさせる。

筆者が伝統的文化の区別は不可能であるという理由を具体例から読みとらせる。

- 三 第二段第一節の読み

- ・ 指名読み（一名）

——知識人による純粋化運動の流れに注目させる。

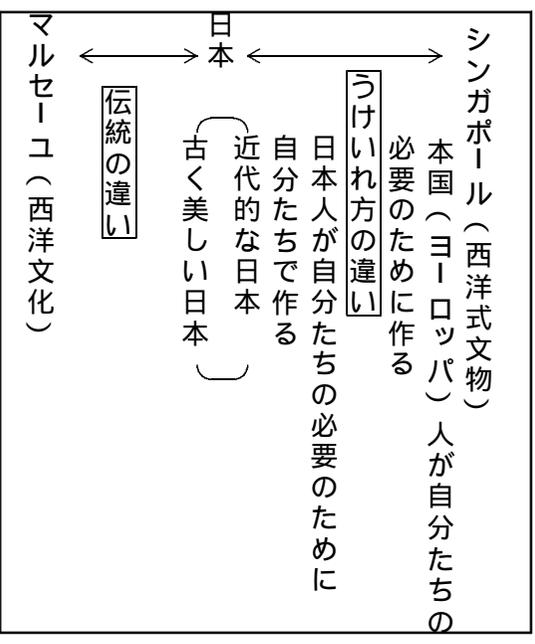
- ・ 純粋化運動の二つの型をおさえさせる。

——西洋化、伝統回帰の二つの型について触れ、その悪循環を読みとらせる。

悪循環を断ち切る方法を通して雑種性に意義を認めていこうとする筆者の姿勢を読みとらせる。

- 四 本時のまとめ・次時の予告

（第九時板書）



【第九時】『日本文化の雑種性』

指導目標

- ・ 純粋化運動の失敗の歴史を読みとらせる。
- ・ 雑種性に積極的意味を見いだすことの必然性とその意義をとらえさせる。

展開

一 目標提示

二 第二段第二、三節の読み

指名読み(二名)

前時の二つの型の成立事情とその失敗の理由を考えさせる。

・ 純粋化運動の失敗の歴史を対比的にとらえる。

—— 国民主義と近代主義の成立過程をそれぞれ対比的にとらえさせる。

共通する失敗の理由を読みとらせる。

共通点から雑種性の意味に結びつける論の進め方に触れさせる。

三 本時のまとめ・次時の予告

【第十時】『日本文化の雑種性』

指導目標

- ・ 筆者のいう雑種性の積極的意味を読みとらせる。
- ・ 日本文化を考える際の展望を明らかにさせる。

展開

一 目標提示

二 第三段の読み

指名読み(一名)

—— 筆者は雑種性のどこに意味を見いだそうとしているかに注目させる。雑種性の積極的意味をとらえる。

—— 日本文化における基本的問題がどこにあるかをとらえさせ、その独自性に言及して雑種性の積極的意味につなげる。

歴史をふまえながら将来に向けての可能性、具体的手法を読みとらせる。全体のまとめをする。

三 本時のまとめ・次時の予告

【第十一時】まとめ

指導目標

- ・ 要約の作業を通じてこれまでの内容について振り返らせる。
- ・ それぞれの日本文化観に対する自分の考えを作らせる。

展開

一 目標提示

二 作業

—— 『水の東西』の本文プリントおよびまとめのてびきその一を配る。

要約のポイントを示し、それぞれの文章を要約させる。主に批判、反論すべき点について考えさせる。

三 本時のまとめ・次時の予告

【第十一時】まとめ

指導目標

- ・ これまでの内容をふまえ、自分なりの日本文化観を作らせる。

展開

一 目標提示

二 作業

—— まとめのでびきその二を配る。

これまでの内容を題材にして自分の考える日本文化とはどういうものか表現させる。共感・反論を起点にしてもよいことを示す。

- 身の回りの具体的事象や自分の考えに対する反論も含め、書くときのポイントを示す。
- 三 本時のまとめ・次時の予告

